西南学院大学　人間科学論集　第 19 巻　第 2 号　　121 ― 135 頁　2024 年 2 月

＜研究ノート＞

保育所における
高い敏感性をもつ子どもの保育（2）

― 子どもの特徴と保育士の支援に着目して ―

山　　本　　佳 代 子

Practicalities of Caring for Highly Sensitive Children
in Nursery School (2)：
A Focus on Characteristics and Support Provided

Kayoko Yamamoto

要旨

保育所保育士の過敏な子どもの保育経験に関するインタビュー調査を行い、保育現場における HSC 傾向のある子どもの特徴と保育士による支援について明らかにすることを目的とした。インタビューデータの質的分析から、抽出された 107 コードは 5 つのカテゴリー【感覚の過敏さ】【苦手な場面】【コミュニケーション】【高い観察力】【失敗への不安】に分類された。下位には（肌にふれる感覚〉〈音〉〈痛み〉〈におい〉〈偏食〉〈受動的な対人関係〉〈大人びた行動〉〈言語コミュニケーション〉〈質問〉〈衝動性・多動性〉〈強い叱責〉〈いつもと違う状況〉〈急に驚かされる〉〈暗がり・狭い場所〉〈人前での会話や発表〉〈気持ちの切り替え〉〈些細なことに気づく〉〈空気を読む〉〈慎重な行動〉〈完璧主義〉の 20 サブカテゴリーが生成された。保育士は子どもの示す高い敏感性に対し、一人ひとりの育ちの状況に応じたサポートを行う一方、支援のあり方について葛藤の経験を併せもつことが示された。

Ⅰ　はじめに

Aron は高い敏感性を示す気質をもつ子どもを「Highly Sensitive Child」と命名し、その特徴として①細かいことに気づく、②刺激を受けやすい、③強い感情に揺さぶられる、④他人の気持ちにとても敏感、⑤石橋を叩きすぎる、⑥よくも悪くも注目されやすいことを説明している（Aron2002＝2015）。

Highly Sensitive Child（以下 HSC）は大音量や多くの情報に圧倒され、些細な刺激に反応する。子どもたちは、神経質、内向的と見なされることもあり、保護者や乳幼児期の子どもの養育にかかわる専門家らは、これらを子どものもつ“弱さ”と評するかもしれない。しかし、これらの気質は視点を変えれば、物事によく気がつき、慎重に行動することができるなど、子どもの“強さ”としてとらえることもできる。

高い敏感性をもつ子どもは環境からのネガティブ、ポジティブ両方の体験から“良くも悪くも”影響を受けやすく（Belsky&Pluess2009）、子ども期に良好な養育環境に置かれた場合は、成人期の外在化問題が少ないことが報告されている（Slagt et ll.2018）。したがって、乳幼児期から HSC の特性に応じた支援を行うことは子どものウェルビービーイングに不可欠であり、HSC の人的環境である保護者や養育の専門家らは、HSC に関する理解を深め、感受性の高い子どものストレングスに焦点を当てた育ちの支援を行うことが求められる。

著者は前報において、保育所保育士へのインタビューから得られたデータの計量テキスト分析を行い、「高敏感な子どもの繊細さ」「思慮深さと些細なことへの気づき」「大人びた言葉」「保育士が想起した高敏感な子どもの事例」「高敏感な子どもと遊び」「高敏感な子どもが苦手なもの」「高敏感な子どもが苦手なもの」「発達障害」「HSC（Highly Sensitive Child）チェックリスト」「保育士が経験上感じた高敏感な子ども」「保育における対応」の 10 クラスターを抽出した。クラスター分析により、インタビュー内容が整理され、保育士らが高い敏感性をもつ子どもの保育経験を有しており、HSC の特性に該当する子どもの行動が保育場面で観察されることを明らかにした（山本 2022）。前報では、計量テキスト分析から乳幼児期の敏感性の高い子どもの保育の概要を把握したが、保育士の語る具体的な HSC 像や保育にあたる意識などについて分析が不

十分であり、より詳細な分析が必要とされた。本報はその続報として、保育士の語りから、保育現場における HSC 傾向がある高い敏感性をもつ子どもの特徴と保育士による支援の実際に着目し、それらを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ　方法

1．調査方法および調査内容

研究参加者の所属施設において、インタビューガイドに沿って半構造化面接を実施した。インタビュー時間は研究参加者 1 人につき、約 40 分であった。内容は研究参加者の許可を得たうえで IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。

調査内容は、基本属性、保育士としての経験年数の他、「とても敏感」であると感じた子どもへの保育経験、子どもと保護者の状況、保育士によるかかわりおよび HSC に関する自由意見とした。その際、インタビューガイドには高敏感な子どものイメージを補うため、Aron（2002＝2015）により作成された「HSC かどうかを知るための 23 のチェックリスト」を掲載した。インタビュー対象者にはチェックリストの項目になるべく多く該当する子どもを想起し、回答するよう依頼した（山本 2022）。

2．分析方法

分析はインタビュー対象者が「とても敏感であると感じた子どもへの保育経験」について語った内容に関する部分とした。その際、発達障害の診断を受けている子どもの事例は分析から除外した。

HSC 傾向のある子どもの特徴に関する分析には佐藤（2008）の定性的コーディングを参考とした。まず、得られたデータよりコードを抽出し、それらのコードから【カテゴリー】および〈サブカテゴリー〉生成した。コードをもとに、カテゴリー、サブカテゴリーの比較作業を繰り返し行うと共に、その過程において発達障害児支援を専門とする研究者のスーパーバイズを受け、分析結果の妥当性および信頼性を確保した。

また、HSC 傾向のある子どもに対する保育士の支援については、保育経験

に関する語りの部分から該当する部分を抜粋し、整理を行った。

3．倫理的配慮

調査にあたり、対象者には口頭および文書で情報保護、調査拒否の自由、調査結果の厳重管理などについて説明し、文書にて研究参加協力の同意を得た。研究参加者の管理者には別途文書にて研究説明を行った。なお、本調査は西南学院大学の研究倫理審査の承認を得て実施した（2021 年 6 月 3 日承認、承認番号 2021-1-3）。

Ⅲ　結果

1．保育士の語りにみる HSC 傾向のある子どもの特徴

インタビューデータをオープン・コーディングした結果、107 コードを抽出した。さらに、これらのコードは 5 つのカテゴリー【感覚の過敏さ】【苦手な場面】【コミュニケーション】【高い観察力】【失敗への不安】に分類され、下位には（肌にふれる感覚〉〈音〉〈痛み〉〈におい〉〈偏食〉〈受動的な対人関係〉〈大人びた行動〉〈言語コミュニケーション〉〈質問〉〈衝動性・多動性〉〈強い叱責〉〈いつもと違う状況〉〈急に驚かされる〉〈暗がり・狭い場所〉〈人前での会話や発表〉〈気持ちの切り替え〉〈些細なことに気づく〉〈空気を読む〉〈慎重な行動〉〈完璧主義〉の 20 サブカテゴリーが生成された（表 1）。

(1) 感覚の過敏さ

サブカテゴリー、抽出コード数ともに最も多く生成されたカテゴリーであり、サブカテゴリーは、〈肌にふれる感覚〉〈音〉〈痛み〉〈におい〉〈偏食〉の 5 つに分類された。

〈肌に触れる感覚〉では、水に濡れることや汚れ、洋服の生地やタグ（ラベル）への不快感の表出、床にふれる足裏の感覚などに対する過敏さが見られた。また、「*ほんとに泥んこが嫌で、絵具とかフィンガーペインティングみたいなのも嫌。みんな気持ちいいねとか楽しいねってするけど、泣くぐらい嫌がって*て」など、保育特有の活動でもある絵具を手や体につけて描画などを行うフィ

ンガーペインティング、泥んこ遊び、裸足遊び、砂遊びなどに対し、嫌悪感を示す子どもの実態がうかがえた。

表 1　保育士の語りにみる HSC 傾向の子どもの特徴

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容（一部抜粋）
感覚の過敏さ	肌に触れる感覚（16）	・袖まくりを冬場とかして戻そうとしたら中だけ戻らないとかあるじゃないですか。そういうのあまり気にしない子は気にしないけど、すごくそれが嫌で嫌で。「もう、きれいにして！」みたいな感じで。 ・お洋服のワッフル地、化繊とかは全然ダメで。決まったものを着てましたね。ちょっと不快になると、全裸になるっていうか洋服を脱いでしまうくらいの。その感覚の敏感さが、一番顕著な特徴ですね。 ・ビニールっぽい床とか。トイレがこんな感じの床で、ふき掃除をしたらちょっとペタってするじゃないですか。その上を歩くのがすごく嫌で、トイレの時も足を浮かせてたりとか。
	音（8）	・音に敏感なので、びっくりするというのもあるかもしれないんですけど。何かほかのところでガタンって音がするとビクってなって、そちらに向いてしまったり。 ・外の車の音とか、救急車の音とかがすごく耳に入って。何か音がしたとか工事してる音がするとか言ったり。あと、お友達の泣き声とかだけでいらいらしちゃうっていうこともあると思います。
	痛み（4）	・何かちょっとけがしたり、ちょっと切れたりするともう半泣きみたいな感じで、もう「痛い」とか、何かいつの傷のかなみたいなのも。 ・痛みに敏感だったのか、例えばほんとにちょっとの傷とかも気になって。それがほんとに痛くてそこに敏感なのか、見えてることが気になるのか、そのあたりはわからないんですけど。
	におい（2）	・くさいとかいうのがすごく嫌みたい。だからトイレとか、ほかの子が何かおむつ替えた後とか、そういうのが嫌で。 ・お布団のにおいが違うとか。靴下が落ちていたら、誰の靴下というのをにおいでまず感じて言ったりするんですよね。先日、私が新しいズボンをはいてきてたら、今日はにおいが嫌だからって言ったり。
	偏食（2）	・食べ物は感覚的に多分苦手なものが多くて、しいたけがまずダメだったり、そういうのはありましたね。好き嫌いというか感覚的に苦手なんだろうなと思いながら。 ・お汁の中に細かく刻んだネギとかが入ってるのをすみっこの方にきれいに並べて。それでお汁だけを飲むっていう。そんな細かいの気にしなくてもいいのにって思うぐらいなんです。
苦手な場面	強い叱責（7）	・強く叱ったりとかすると傷つきやすいというか、そういうような子どもだった気がします。 ・強く何か言われたら、もうそのことが嫌みたいな感じで。話をあまり聞けないというか、だから説明するという感じのほうが、届くような感じはありましたね。
	いつもと違う状況（6）	・行事、こう普段と違うことがドキドキして。まだ何にもしてないけど涙が出ちゃう。 ・食事の順番が変わるとか、例えばおしっこが出てなかったから食事の後におしっこに行くとか。そういうふうにするとぐずぐずなっちゃう。いつものパターンが崩れてしまったときに、うまくいかなくなる。

	急に驚かされる（4）	・驚かされたりとかはもう絶対ダメで。年上の子どもとかがよかれと思って、笑わせてあげようって感じで「うわっ」とかして。泣いて、もう「怖かった」って。 ・鬼ごっことかが初めは全然できなくって。鬼ごっこが苦手な子とかいるのかと。急にこう、タッチされると怒っちゃって。
	暗がり・狭い場所（2）	・暗いところが怖かったみたいで、お母さんからは聞いてなかったんですけど。劇場に連れて行ったときに、暗くなった瞬間にもうワーって泣き出して、もうしゃくり上げるように泣いて。 ・暗いところ、あとは狭いところとか初めての場所もすごく苦手な子どもでしたね。
	人前での会話や発表（2）	・セリフも覚えてて、大きい声とかじゃないけど小さい声で言えるし、全部覚えでいるんだけど。いざ本番で幕が開いたら、もう無表情ですよね。表情なく、連れて出てもらって、帰るって感じ。 ・緘黙ではないけれど、しゃべるのが苦手。発表になったらすごく緊張した顔になったりとか。
	気持ちの切り替え（3）	・感情がぱっとなるとこう、なかなか戻ってこれなかったりとか。物をぱーんと（投げたり）。小さい時はあったりので。 ・「もう、また」みたいな態度を取るともう絶対にそこから戻ってこれなくなるから。そういうことにはすごく過敏に受け取って、本人もきつそうだなとは思って。
コミュニケーション	受動的な対人関係（13）	・どんどん行くタイプではないですよね。自分から訴えるタイプではないですね。 ・（保育士には）もう目で、助けてっていう目で訴えてきてましたね。 ・お友だちと距離が近すぎたりとか、自分から行く分はもちろんいいんですけど、何かわーって遊んでる子たちがすごく近くにいたりするのはあんまり好きじゃなくて。パーソナルスペースが守れそうな場所に自ら行ってそこでちょっと遊んだり。
	大人びた行動（4）	・同じ学年の子どもたちよりもちょっとおしゃべりが達者だったり。遊びもほかの子よりもうちょっと難しいことができそうな感じの子。 ・お姉ちゃんもいて、何か先を行くような遊びがほんとはできそうで。何か物足りなさがあるような感じもあったの。
	言語コミュニケーション（4）	・年少の子って会話がうまく成り立たなかったりすることもあるけど、その子は対等に、言ってることを理解して話ができるから。 ・おしゃべりが大好きで、気付けばその子とばかり話してるんじゃないかと思うぐらいで。
	質問（3）	・「これ何て言うの」と気になることは全部質問してきます。 ・「これはどうしてこうなの」とか、よくあるなぜ、なぜみたいなところでもあるんですけど。そういうふうなことはほかの子よりも多く言っていた気はします。
	衝動性・多動性（3）	・常にもうウロウロ、ウロウロ走り回って、走り回って、お友だちをたたいてとか、そういう子ども。 ・友達が遊んでいる物の魅力を感じて、行ってしまったり。○○ゃんが遊んでるから自分はこれをしようとか、貸してって言いに行こうとか、その前にもうその物しか目に入らなくって。何かその物の魅力をすごい感じて、突発的に行ってしまうことが多い気がします。
高い観察力	些細なことに気づく（6）	・周りをよく見ていて。水筒をロッカーの中に入れているんですけど、誰かの水筒が残ってたりしたら「○○ちゃんの水筒があった」って。落とし物もよく拾ってくれるし。 ・保育士が髪を切っているとか。普段あまり化粧をしないお母さんがその日はメイクをしてたのに気づいていたり。

		・においや光に敏感な子なんですけど。午前中にはなかった午後のおもちゃやカゴなどをお部屋に置いただけで気づく。絶対これ気づかないよねっていうことに気づきます。
	空気を読む（6）	・自分が疲れてるなっていうときあるじゃないですか。そういうの敏感に感じて。そんなときほど協力をしてくれたり。表情で読むっていうか。 ・何も言っていないけど、マイナスなことに対しては感じ取って。だから友達との中でもすごい落ち込んでしまう。
失敗への不安	慎重な行動（7）	・とりあえず初めてすることはまず一歩引いてしまう。 ・何かしようとするときに絶対に振り返って大人を見る。自分がしていいのか悪いのかっていうところで、絶対誰かを頼ってるっていうか。 ・間違えたくない、失敗したくないっていう気持ちがあるから。新しいゲームを出しても、そばに来て見てはいるけど「やる？」って誘うとしないんですよ。でもずっとそばで見ていて。一緒にしてる子たちがいったん片付けると、すぐに出して自分で触ってみて、仲良しの友達呼んだりとか。やりたいけど、ほんと失敗はしたくないっていう。
	完璧主義（5）	・完璧主義で、上手に描けないと嫌だから絵を描くのが苦手と言って。自分が思ったように描けないとたぶん嫌なんでしょうね。だから最初から描かない。 ・自分が遊んでるものを途中で何かされるとかも嫌だし。一つダメだったら百ダメじゃないけど、そういう感じのところも少しあったので。

※サブカテゴリー（）の数字は各サブカテゴリーに類する総コード数

〈音〉のサブカテゴリーでは、保育室の音や声だけではなく、保育中に室外から聞こえる救急車のサイレン、工事の音、近隣の小学校で行われている運動会練習の音などに敏感に反応し、嫌がる様子が語られた。

〈痛み〉に過敏で、わずかな傷と見受けられた場合でも、長時間そのことにこだわる、痛みを訴え続ける、泣くなど、子どもの反応が大きいことがわかる。また、〈におい〉に対する高い感度をもち、食べ物への〈偏食〉傾向をもっていることが示された。

(2) 苦手な場面

保育における子どもの苦手な場面として、〈強い叱責〉〈いつも違う状況〉〈急に驚かされる〉〈暗がり・狭い場所〉〈人前での会話や発表〉〈気持ちの切り替え〉の６つにサブカテゴリーが分類された。

〈強い叱責〉では、保育士の注意に対し、子どもの表情に変化が見られ、傷つきやすいと感じた場面があることが語られた。〈急に驚かされる〉ことへの恐怖心があり、「*驚かされるのが。だから、鬼ごっことかが初めは全然、あん*

まりできなくって」などあそびの場面でも予期しない状況に対する不安をもつことがうかがえた。また、〈暗がり・狭い場所〉が苦手であったり、「*行事とかいつもと違うことが入ると寝れなかったり*」など〈いつもと違う状況〉に緊張が高まる子どもの姿が示された。〈人前での発表〉では、練習時と同様に演じたり表現することができない、人前で話をすることが得意ではないと思われる子どもが示された。さらに、感情が高まると〈気持ちの切り替え〉が難しい側面を持つ子どもの存在もうかがえた。

(3) コミュニケーション

サブカテゴリーは、〈受動的な対人関係〉〈大人びた行動〉〈言語コミュニケーション〉〈質問〉の4つに分類された。

〈受動的な対人関係〉のサブカテゴリーでは、「*何か言われたらするみたいな感じ。おとなしい子どもで、どっちかっていうと友だちと一緒に引っ張られていくタイプ*」など受け身の姿勢や多人数より少ない人数で遊ぶことを好む姿が示された。また、真面目で適応しているように見受けられ、同年齢の子どもよりも少し〈大人びた行動〉を見せる子どもの存在が伺えた。一方、〈言語コミュニケーション〉〈質問〉ではよくしゃべり、保育士へ繰り返し問いかけるなど、先述の受動的でおとなしい子どもとは真逆ともとらえられる子どもの姿が語られた。加えて、「*常にもうウロウロ、ウロウロ走り回って、走り回って、お友だちをたたいて*」など〈衝動性・多動性〉の行動が見られる子どもも示された。

(4) 高い観察力

サブカテゴリーは、〈些細なことに気づく〉〈空気を読む〉の2つに分類された。

「*午前中にはなかった午後のおもちゃやかごなどをちょっとお部屋に置いただけで気付く*」「*あの年齢でそんなに気付く？　みたいに周りをやっぱり見てる*」など、〈些細なことに気づく〉ことができ、他児と比較して観察力が高いことがうかがえる。

〈空気を読む〉では、「*いい子だったから、そう言われてみたらもしかしたら職員の顔色とか、態度とかを見てたのかと*」「*同じ学年でも、ゆっくりな子ど*

もとかが何人かいらっしゃって（中略）、“ちょっとあの子を励ましてきて”って言うと、“大丈夫だよ”と言ってくれたり、こちらから言わなくてもしてくれるとか、そういうところはすごくあるんですよね」など、保育士をよく観察し、期待される行動をとることができる子どもの存在がうかがえた。

(5) 失敗への不安

サブカテゴリーは、〈完璧主義〉〈慎重な行動〉の２つに分類された。

〈慎重な行動〉では、「*とりあえず初めてすることはもうまず一歩引いてしまう*」「*誰かがしたら安心してするとか、できる、できないとかっていうのも含めてですね（中略）、それを見て自分の中でできる判断をしているのかな*」など、新規場面では率先して行動せず、周囲をよく見てから慎重に行動する様子が示された。また、「*自分が遊んでるものを途中で何かされるとかも嫌だし、一駄目だったら百駄目じゃないけど、何かそういう感じのところも少しあった*」など、保育場面において〈完璧主義〉な姿を示す子どもの姿が語られた。

２．HSC 傾向のある子どもへの保育士の支援

(1) 保育において高い敏感性をもつ子どもに対する保育士の配慮

保育士の語りからは、HSC 傾向のある子どもは、日常の保育において感覚の過敏さや苦手な活動、場面などがあることが理解できた。子どもが取り組みに躊躇し、やりたくないと感じている場合、保育士は子どもが安心して活動に取り組めるよう工夫を行っている。しかし、それでも子どもが参加を拒んだ際は、無理に取り組ませないよう配慮していることがうかがえた。

> 「*泥んこ遊びとかも、“楽しいよ、ほらしてみて”“土って気持ちいいよね”って最初は言って（中略）・・何か少しずつ楽しさが分かっていったら入れるじゃないかなとか思って。“ちょっと指だけつけてみて”とかいろいろしたけど。やっぱりもうほとんど土に触れないまま終わってしまいましたね。*」

「*嫌なものを無理やりさせるのもかわいそうだから、例えば砂で裸足で遊んでいたときとかも、無理やりっていうのはさせないようにしていました。*」

子どもが不安や恐怖心を抱きやすい場面を想定し、あらかじめそれらの状況をつくらないよう、保育士が事前に子どもへ説明し、前もって気持ちの準備ができるようなはたらきかけを行っていることも示された。下記の語りからは、衣替え時は他の子どもよりも時間の余裕をもち、その子どものペースで適応していく過程を重視する、子どもの不快感を長引かせることがないよう速やかに対処する、子どもにとって苦手な場面が控えている際は丁寧に前もって説明をしておくなどのサポートを行っていることが理解できる。

「*衣替えのときとかは無理なくするっていうか、少しずつ慣れるようにゆっくり何か早めに着替えさせるっていうか*」

「*事前に説明したり、その子が苦手だなと思うことは極力防ぐようにする。例えば洋服がぬれたらすぐに着替える、音が鳴る前に“今日避難訓練で音が鳴るから、不安だったらそばにいるよ”とか。*」

保護者にも同様に、子どもの苦手な状況を作らないようなはたらきかけを行い、子どもの過敏性を保護者が否定的にとらえないようサポートしていることがうかがえた。

「*保護者の方に、においが敏感だからお布団とか忘れるとなかなか寝付けないので、忘れないようにお願いしますって言っていました。*」

「*“この子は穏やかで、大器晩成型なんだし”という感じで見てくれる親だったら、子どもはほっとできるのかなと思うので。保育士としてはそのあたりのカバーというか、支援が課題かな。*」

(2) 高い敏感性をもつ子どもに対する保育士の支援意識

保育士からは保育場面において敏感性の高い子どもをどのようにとらえるべきか、判断に迷った経験が語られた。

「*わたしたち何となくかかわり方を見つけて、やっているので、何かそのときに気がつくっていうのはあんまりないんですけれど。環境によるものなのかなと思っていたりもしたんです。判断の基準っていうのが、振り返ると難しかったかなって。*」

「*最初は裸足で外はなかなか（出られない）っていう子が結構いるんですけれど、大きくなってもそれが改善されないというか難しい子どもは、そういう敏感性なのかなと思ったりするんです。*」

また、苦手なことを克服しないまま卒園していくことが、就学後の子どもに影響を及ぼす可能性を危惧する語りも見られた。HSC 傾向の子どもの過敏さゆえに取り組みが困難であると思われる場合は、「無理強いさせない」ことを保育士は重んじているものの、葛藤を抱えている側面も示された。

「*ほんとにいろいろやってみたんですけど、泥んことかに関しては。何かこのまま小学校行ったら立ち向かって行けないんじゃないかって思って。*」

「*まだ年少さんだから小学校とかはまだ先だけど、小学校に行くときもまだ同じようだと・・。*」

近年、保育現場では「気になる子ども」として特別な配慮を必要とする子どもや保護者に対しては、個別の支援が重要であることが認識されてきている。保育士は、障害等の明確な診断の有無にかかわらず、目の前の一人ひとりの子どもの成長発達に必要な支援を行うという意識をもって保育を実践しているこ

とがうかがえた。

「*いろんな情報があってその子にとってどれがベストなのかな、より良い方法っていうのを考えていけるような保育になってきてるとは思います。その子の特性がこうならこの保育をこう変えてみようとか、そんな意識の転換が保育士側にもできるようになってきてるのはあるのかなと思いますね。*」

「*その場その場でいろんな、まあ支援じゃないけど方法で。（敏感性の高い子どもは）そんなに目立たない程度にというか気にならない程度に過ごしてきてるのかなというようなことはあるのかな。*」

「*物事をほんとに深く考える子について、待ってあげられてたのかなっていうのはありますね。*」

一方で、保育士がHSC傾向をもつととらえる子どもの中には、受動的な対人関係をとりやすく、場の空気を読んで行動できるなど、感受性の高さが気になるものの、保育場面において多くの配慮を必要としなかった経験も回顧的に語られた。

Ⅳ　考察

保育所保育士が経験している高い敏感性を持つ子どもの保育経験から、HSC傾向がある子どもの特徴と保育士による支援の実際について、インタビューデータの分析をもとに明らかにした。本調査ではAron（2002＝2015）により作成された「HSCかどうかを知るための23のチェックリスト」をインタビュー時に用いたこともあり、分析から得られたカテゴリーおよびサブカテゴリーは、この23項目を概ね網羅する内容であった。

抽出されたコード数が最も多かったカテゴリーは【感覚の過敏さ】で、子どもの触覚、聴覚、痛覚、嗅覚、味覚にかかわる過敏さが日常の保育において表

出される事例を得た。保育所は集団での活動が多いため、感覚過敏をもつ子どもは音やにおいなどの刺激にさらされる機会は少なくないと考えられる。町田ら（2020）の保育所保育士を対象とした調査では、「人に触られるのを嫌がる・汚れる遊びを嫌がる子といった気になる子」を抽出して回答された対象児のうち、何らかの感覚過敏をもつ子どもがいるとした回答は全体の 87.1% であったことが報告されている。また、感覚過敏の特徴によって保育士の保育困難感や工夫に相違があることも明らかにしている。これら実態からも、過敏性をもつ子どもに対する保育のあり方を検討していくことの必要性は高いと考えられる。

【コミュニケーション】や【苦手な場面】のカテゴリーを概観すると、HSC 傾向の子どもは、集団の中で積極性が目立つ行動が見られず、おとなしく内向的な子どもとして保育士に認識されているが、その一方で対照的に言葉数が多く、多動性・衝動性が高い行動など、発達障害の子どもが示す行動に類似した印象をもつ内容も語られた。これは【感覚の過敏さ】カテゴリーについても同様であり、自閉症スペクトラム症の子どもの感覚過敏の状態像とも重なりを見せる（水口 2020）。両者の相違や関係性については、いくつかの知見が明らかにされているものの、研究において統一した見解はなされていない（串崎 2018，岐部 2019）。子ども期の特性もふまえると、HSC の感受性の高さによる行動と発達障害に起因する行動等との弁別は保育現場では困難なことが推察される。

【高い観察力】【失敗への不安】では、HSC 傾向の子どもは周囲の変化や他人の気持ちに敏感であり、物事を行う際にはよく考え、慎重に行動することが語られた。これらは刺激を受けやすいこととあわせ、HSC の子どもを理解するうえでの主要な特徴を示すものであった。高い感受性をもつ子どもはストレスを感じやすく、受け身で内向的であるなど、ネガティブに認識されやすい側面を持つとされる（Baryła-Matejczuk et al.2020）しかし、子どものもつ慎重さ、高い洞察力は集団活動や対人関係においてポジティブに影響する力でもあるだろう。感受性の高い子どもをとりまく周囲のおとなは、子どもが安心できる環境を提供し、子どものストレングスを発揮できるようなはたらきかけを行う必

要があると考える。

保育士のHSC傾向の子どもへの支援に関する語りからは、子どもの過敏性を認識しつつも、子どもを否定することなく、子どものペースでサポートを行っていることが理解できた。しかし、これらのかかわりのあり方と、子どもの苦手意識を克服することの重要性との間で葛藤を抱えている様子もうかがえた。近年では、子ども一人一人に応じた保育を行うことは実践の基盤となっている。また発達障害をはじめ、保育実践において特別な配慮を必要とする子どもについての保育の方法論に関する研究も蓄積されてきている。しかし、HSCの認知は十分に高まっているとは言えないであろう。今後はHSCの理解を促進し、適切な保育につながるよう実践のあり方を検討していくことが重要である。

V　結語

本研究では保育所保育士の過敏な子どもの保育経験に関するインタビューデータから、質的分析を通して保育現場におけるHSCの特徴および保育士の支援の実際について明らかにすることを目的とした。

その結果、【感覚の過敏さ】【苦手な場面】【コミュニケーション】【高い観察力】【失敗への不安】の5つのカテゴリーが生成され、保育士がとらえる高い敏感性を示す子どもの特徴を把握することができた。また、保育士らは一人ひとりの育ちの状況に応じた支援を行う一方で、集団での保育場面や卒園後を見据え、葛藤の経験をもっていることも示された。

本稿では保育現場における高敏感な子どもの特徴をとらえることができたと考える。しかし、今回の調査は限られた人数での調査であった。今後は質問紙調査を実施し、量的データの分析から、HSCの子どもの育ちの実態等について明らかにすることを課題としたい。

謝　辞

インタビュー調査にご協力を賜りました保育士の皆様、また調査実施にご快諾を賜りました施設長ほか関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP20K02285 の助成を受けたものです。

引用文献

Aron, E. N.（2002）. The highly sensitive child: Helping our children thrive when the world overwhelms them. Broadway Books. New York.『ひといちばい敏感な子』明橋大二訳, 2015, 1　万年堂出版 .

Baryła-Matejczuk, M., Artymiak, M., Ferrer-Cascales, R., & Betancort, M.（2020）. The Highly Sensitive Child as a challenge for education – introduction to the concept. Problemy Wczesnej Edukacji, 48（1）, 51-62.

Belsky, J., & Pluess, M.（2009）. Beyond Diathesis Stress: Differential Susceptibility to Environmental Influences. Psychological Bulletin, 135（6）, 885-908.

岐部智恵子（2019）「敏感性の高い子どもと環境からの影響：感受性反応理論からの示唆」子ども未来紀行：学際的な研究・レポート・エッセイ https://www.blog.crn.or.jp/report/02/265.html（2021 年 10 月 1 日）

串崎真志（2018）「高い敏感性をもつ子ども（Highly Sensitive Child）の理解：自閉症・高敏感者・エンパス・不登校」関西大学人権問題研究室紀要，76，27-55.

町田唯香・橋本創一・堂山亞希・渕上真裕美（2020）「感覚過敏のある幼児への養育に関する調査」東京学芸大学教育実践研究，16，113-117.

水口崇（2020）「自閉スペクトラム症児者の感覚過敏」信州心理臨床紀要，19，175-191.

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践』新曜社

Slagt, M., Dubas, J. S., van Aken, M. G., Ellis, B. J., & Deković, M.（2018）.Sensory processing sensitivity as a marker of differential susceptibility to parenting. Developmental Psychology, 54, 543-558.

山本佳代子（2022）「保育所における高い敏感性をもつ子どもの保育（1）－計量テキスト分析を用いて－」西南学院大学人間科学部論集，18(1)，163-175.

西南学院大学人間科学部社会福祉学科